



凌蝕病棟退魔録

姦禁轟撃リ

淫妖

電

凶

【原作/表紙】 TinkerBell

【小説】 斐芝嘉和

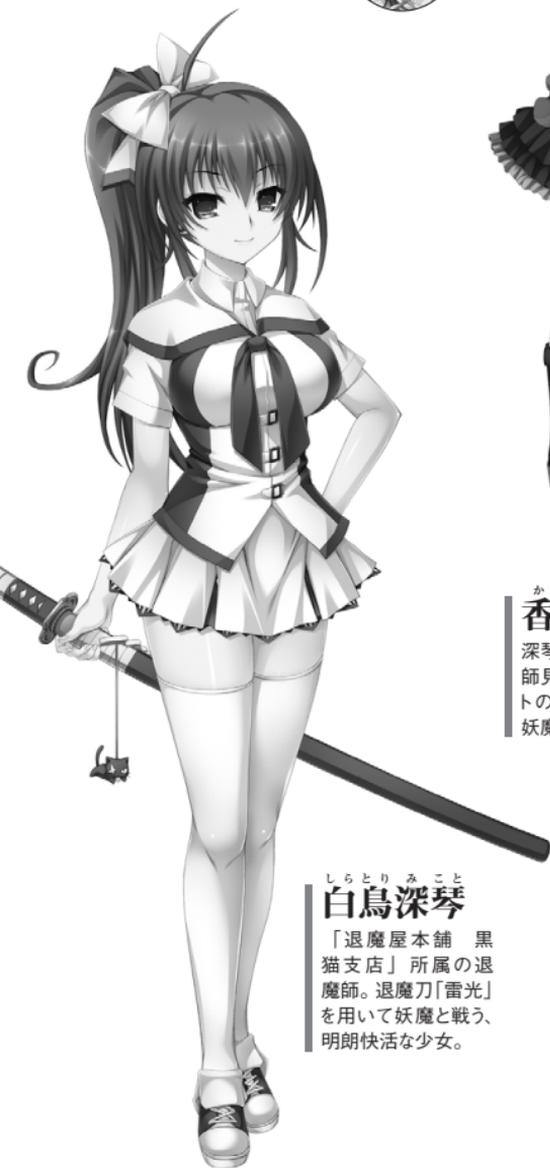
【挿絵】 汰尾乃きのこ

立ち読み版

序章	エピソード(前)	006
第一章	淫宴の兆し	012
第二章	敵地潜入	026
第三章	淫虐拷問	043
第四章	再潜入	102
第五章	淫蟲の罨	115
第六章	幼果侵蝕	141
第七章	淫宴の果てに	165
終章	エピソード(後)	241

登場人物紹介

Characters



しらとりみこと
白鳥深琴

「退魔屋本舗 黒猫支店」所属の退魔師。退魔刀「雷光」を用いて妖魔と戦う、明朗快活な少女。

たちばな
橘木ヤマト

白鳥姉妹と同じく「黒猫支店」に所属する退魔師の少年。

よる
夜

「退魔屋本舗 黒猫支店」のオーナー。人語を解する猫又。



このえりんこ
九重鈴子

九尾のキツネの力を受け継ぐ退魔師少女。相棒はぬいぐるみの「マンディー」。

かやますい
香山水依

深琴の同僚となる退魔師見習いの少女。ヤマトの幼馴染でもある。妖魔の気配に敏感。



しらとりたける
白鳥武

深琴の双子の妹。過去の妖魔との戦いの古傷により現場を離れ、「黒猫支店」の経営をメインに活躍している。

（ああダメ、こ、こんなことでは……妖魔さんの卵を、産みつけられて、しまおう……）
 頭の隅で思ってみても、もう、イヤだと思いきることはできなかつた。

蟲や触手が、それほどまでに気持ちイイのだ。

「うう、ああ……ふうう……はあ、ああ……ンあああ……」

粘膜花弁を踏み越えて膣孔に集まる蟲たちの気配に、水依の胸が異様に高鳴る。

（ら……らめ、私、もうらめ……これ以上はもう、もう……）

堕ちていくことが分かつていても、水依の頬は弛んだまま。

いまでもこんなに気持ちイイのに、もつともつと気持ちよくなるのだとしたら、それは
 いったいどんな気分なのか——と。

ぬじゅぶつ！

「ぶふあつ!! えあツ!! え……ええああツ!!」

膣穴に、予期していたより遥かに太く硬くゴツゴツとした棒状の物体が、勢いよくねじ込まれた。院長が姿を消す前、よがり死ぬまで肉悦を与え続けると説明していた大小の瘤だらけの触手が、蟲たちに先んじて水依の処女膣穴を挿し貫いたのだ。

「い、痛い……うう、あ……えっ!! や、あ……ンあうヒい!!」

破瓜の激痛が一瞬で吹き飛び、いままでの肉悦がまるでオママゴトだったような、鮮明で強烈な快感が股間に爆発。杭ほどに太い快感が子宮を貫き、脳天にまで響く。

「な……なに？ な、なんれ……なんれこんなに……えぶあつ!? はひ、はひ……はひうううっ!? ら、らめ……ああらめらめ、あぎえええっ!!」

汗ばむ背を反らせ、触手に搾り上げられた巨乳を重々しく弾ませて、よがり喘ぐ水依。

その膣孔を——ぐぼっ！ ぐちゅっ！ ぐぼちゅっ！

無数の硬い瘤を生やした太い触手が力強く抉り、穿つ。

芋蟲状の妖魔たちに掻き回された直後とはいえ、まだまだ無垢同然だった美少女の膣洞が、催淫毒を滲ませた肉瘤に強く激しくしごき回される。

「やうあ、あ……あうヒイツ!? ら、らめえ、らめ、らめええっ！ こ、壊れちゃう、壊れちゃう……ンあ、あう、ああああっ!!」

ペニスのようなピストン運動だけではない。

深く浅くを繰り返しつつ、太い触手がしなやかにのたうっ。

経験の浅い膣洞をあちらこちらに押し歪め、みっしりと生えた無数の肉瘤を異なるリズムで震わせて、繊細な処女膣壁を傍若無人に蹂躪する。

（い、痛い……痛い痛い……う、うん、痛くはない、痛いんじゃない、気持ち、イイ……けど、ダメ……これダメこれダメ、は、激し、すぎいいっ！）

わずかに残った理性が、あまりにも強烈な感覚に震え上がる。掠れた意識が軋み、胸の内に悲鳴を上げる——が、

「ンあ、あ、あええ……お、お腹が……ああ、ああアソコがあ……はあ、うう、ああああ……あえ、あえあえ……ああうううああああおとおおッ！」

水依の顔はいままで以上に蕩け、涙と涎が止まらなくなった。

くぼちゅくぼちゅと抉られている膣洞から肉悦の波が溢れ出し、触手に揉み歪められた巨乳が茹だつたように赤らむ。吸盤に吸いつかれた乳首が弾けんばかりに勃起する。

大きく展翅された淫唇に、ふつ、ふつ、と滲み出す愛液の滴。

蟲たちに群がられている米粒大のクリトリスが、弾けんばかりに勃起する。

頭では怯えていても、身体はすっかり悦んでいた。

妖魔たちの一挙手一投足が、水依の乳房に、乳首に、腕や脚や腹などに——口の内側や膣奥、直腸粘膜などに、めくるめく快感を産みつけまくる。

さらに——。

(うっ!? あ……お、お腹が……お腹があっ!?)

振動する触手が目指す先、膣奥のさらに奥に、熱い衝撃が膨れ上がった。

子宮頸管を潜り抜けた人差し指くらの芋蟲たちが、とうとう子室に到達し、羊水の中で狂ったように暴れ始めたのだ。

通常なら絶対に有り得ない淫悦だから、耐えようがない。

「ふぎ、ふぎ……ぎひいい——ッ!？」

膺の入口とヘソの裏側に炸裂する激感に打たれ、白目を剥き涎を垂らし、分娩台に縛りつけられた細い裸体を鋭く反り返らせる水依。

一度だけでなく二度、三度——いや、弓形に反り返ったまま硬直して、ビククッ！ ビククッ！ と痙攣し始める。

噴き出す汗、溢れ出す愛液。

「えああああおお、えあ、ああおおお……ッ！ らめええ……よ、妖魔しゃん、らめらめ、ら……めええッ！」

涙と涎をとめどなくこぼし、頬を淫らに弛めて舌つ足らずに鳴く。

分娩台に縛りつけられた細い手足が、駄々っ子のように激しく揺れる。

（浮く、浮く浮く……と、飛ぶううっ！ う、ううん、違う……ああ、ああ堕ちる、堕ちる堕ちる……堕ちて、いくううう……ッ！）

身体の内も外も、何十匹、何百匹という妖蟲たちに蹂躪されて、もはや限界寸前だ。手足の感覚が薄れ、自分がどんな姿勢になっているのかも分からなくなり——。

「はひ、はひ……はひい……ひい、ひい……ンひい……ッ！」

小刻みに痙攣しながら掠れた呼吸を繰り返す。

ツリガネムシのような膨らみに包まれ、細かな繊毛に撫でまくられている乳首が、甘く痺れて痛いほどに気持ちイイ。クモに似た蟲たちに群がられ、淫毒の滲む爪を何百本も突

き立てられた巨乳は、蠢く触手にギユウギユウと絞られて燃えるように熱い。

鉗子に開かれたままの秘裂には異様な形の蟲たちが群がり、小さな脚や尖った口吻を使って繊細な粘膜花弁を掻き回す。滲む愛液をクチュクチュと鳴らし、ヒクつく尿孔にも細い触手を挿し込んで、

「ふ、うう……ンぎいっ!!」

喘ぎ悶える水依を絶頂の際まで押し上げていく。

「ゆ……許して……もう許してえ、妖魔……しゃああんっ!」

涙声で哀願しても、もちろん蟲たちは止まらない。

むしろ余計に激しく震え、力強くのたうって、小さな脚や尖った口吻を使って喘ぎよがる美少女をさらなる高みへ押し上げていく。

「ああ、うう、ああああ……お、お尻、も……ああお尻、お尻お尻……お、おし……り
いいいいいっ!」

鱗の生えた太い触手に犯され、奥の奥まで舐めまくられる排泄器官。

「ひうッ!? く……ンひいっ!! クリクリらめ……らめったら、らめええっ!」

蟲の大顎に甘噛みされる、限界以上に膨れ上がったクリトリス。

「やあ、ああ、ああああっ!! く、クリクリが……クリクリがああっ! ひい、はひ……
ひい……ひはっ!? 乳首もっ!? ち、ち……乳首もおおッ!!」



冷たい粘液に濡れたナメクジの肉膜が、ぷにぷにとした肉畝の上で舌のように蠢く。指より器用な触手の先が割れ目の縁にかけられて、

——くぱあ。

股布の下で無遠慮に掻き開かれる、幼気な秘裂。

「あうんっ!!」

蜜まみれの粘液花卉にいままでとは別種の淡い快感が湧き起こり、四つん這いになった小さな背筋がゾクゾクツツと震えた。あまりの心地よさに頬が弛み、一瞬なにもかも忘れそうになる。

「……ッ!! だ、ダメ……ダメなのですううっ!!」

慌てて我に返っても、すぐにまた、恥ずかしい割れ目に快感が閃く。

しかも今度は一瞬だけでなく、何度も何度も閃いては消える。

「ふぁッ?! ンくっ?! う……ンうう……ッ!!」

何枚ものいやらしい舌でびちよ、ぺちよ、と舐めまくられているような——赤ん坊の無邪気な指に、抓まれ弾かれ撫でまくられ、くちゅ、にちゅ、と弄られているような——。

鈴子の幼気な秘裂を大きく掻き開いたナメクジや触手が、蜜の滴を浮かべた粘膜花卉に気づき、催淫液に濡れた縁を細く伸ばして、ぬちゅ、くちゅ、としごき始めたのだ。

繊細な淫唇の縁をツツ、ツツ、と撫でたり、軽く抓んで引っ張ったり、磨くようにしご

いたり、滲む愛液を舐め取ったり。

そのたびに温かく心地よい細波が沸き起こり、秘裂の中に反響する。

「やだ、ダメ……これ、やだあ……ッ！」

羞じらい叫ぶ声が、甘い。

己の声に含まれた淫らな響きに、鈴子は耳の先まで真っ赤になる。

「こ、これ以上、されたら……私……私……ふう、はあ、ふう……どこ……どこにいるのです、バカ乳女あつ！　り、鈴子様を、た、助けなさい、なの……ですう……ふあつ！！　うう……んくっつ!!　ううう……」

なんとか数歩這ったものの、それが限界だった。

催淫液でぐちよぐちよに濡れたゴスロリドレスが、薄い背や柔らかな腹にいやらしく絡みつく。その下で大きな大きなナメクジが蠢けば、振れて伸びきった裏地に全身が揉みまぐられ、体幹に淫らな気持ち蓄積する。

「ふう、はあ……んひっ!!　や……ああつ!!　なに……なに……これえっ!!」

胸と股間に弾けて消える、鮮烈な快感。

勃起乳首とクリトリスに気づいた妖魔たちが、競うように口を寄せ、敏感な肉豆の表面を舐め始めたのだ。

口といっても穴はなく、少し硬い粘膜が何千何万という細かな突起を立てた、鑪^{やすり}状の器

官。快楽神経の塊をじより、じより、としごきあげ、微細な傷をつけて、そこに濃密な催淫液を流し込む。

「ひうつ!! ンひ……くああつ!!」

ただでさえ敏感な肉豆が、たちまち燃え出しそうなくらい熱くなった。

胸と股間から脳天へ向け、痺れるような快感がひっきりなしに走り抜ける。

そのたびに四つん這いになった小さな身体がビクビクッ、ビクビクッと震え、涙に濡れた頬が赤らんでいく。わななく唇から溢れ出す吐息が、次第に甘い響きを帯び始める。

「や、あ、あああ……やあなのですうつ! 妖魔はイヤ、イヤ……ああつ!!」

大きなナメクジの間から湧き出てきた、指先ほどの大きさの妖魔が、繊細な淫唇に貼りついて傍若無人に這い回る。滲む愛液が舐め取られ、乳首やクリトリスに閃いているのと同じような快感が、あどけない秘処全体に一気に膨れ上がる。

「ひあつ!! う、あああ……あ、熱い……熱いの、れしゅううッ!」

細胞分裂でもしているのか、鈴子の割れ目に次から次へと小さなナメクジたちが這い込んで来た。のたうつ触手も次から次へと少女の身体に群がって、幼気な胸に、火照る柔肌に、喘ぐ唇に、潤んだ秘裂に、ぬちちぬちぬちちゆといやらしい催淫液を擦り込みまくる。

人間の指より器用で執拗な愛撫によって、割れ目の中に痺れるような快感がたちまち充滿。小さな妖魔に群がられた肉ピラに恥ずかしい蜜がジユクジユク滲む。

物理的な刺激だけでなく、濃密な妖気によって炙られてもいるから、その量は尋常ではない。温かな愛液が火照った肉畝を乗り越え、桜色に染まる柔らかな内股に幾筋も垂れる。さらに――。

「く……ッ!? う、ンああつ!? や、ダメ……そこは、お尻いいっ!」

うしろへクイツと突き上げられた小振りな尻、濡れたスカートとショーツの内側にまで入り込んだ肉イボナメクジたちが、キュツと窄まった肛門をまさぐり始めた。

羞じらい喘ぎ、必死に尻穴を締める鈴子だが、妖魔たちは執拗だ。波打つ縁を尖らせ、指のように蠢かせて、細かく皺の寄った菊膜を磨くようにしごく。滲む粘液をしきりに擦り込み、ときどき穴に挿し込んで、排泄器官にも淡い快感を繰り返し産みつける。

「やだ……お尻……いやああつ!」

淫悦に蕩けた声で鳴き、恥辱の肉穴に群がったナメクジたちを振り落とそうとして、うしろへ突き上げた小振りな尻を必死に振り始める鈴子。

だがそれは、肉の悦びに我を忘れた牝の動きだ。

犬のように四つん這いになり、震える手足を突っ張った小柄な美少女が、はあ、はあ、と喘ぎながら狂ったように腰を振る。カクン、カクン、と空腰を打つたび円らな瞳が蕩け、喘ぎ声が艶めかしさを増して、

「うあ……あつ!? や、やですう、やなのですううっ! なんだか、なんだか……わ、私

……変な、気分……ふう、はあ……ふうう、はあ、ふうううう……あ……あつ!!
ああ、あああ、ああああつ!! こ、腰が……と、止まらないのですうつ!!」

叫ぶ唇から涎が垂れる。

跳ね上がった顔が蕩け、涙に濡れた頬がいやらしく弛む。

さらに――。

「ひあつ!! え……あつ!! や、やら……触手、まれええつ!!」

天井から垂れてきた肉紐が、丸く膨らんだ尖端からさらに細い触手を生やし、鈴子の尻穴をまさぐり始めた。羞じらい窄む菊膜に先を引っかけ、無理矢理大きくこじ開けようとする。あるいは、濡れた尖端を震わせて括約筋を愛撫し、蕩けるような肛悦を産みつけて、獲物の抵抗を弱めようとする。

妖魔たちに責めまくられている乳首、淫核。

粘膜花弁に充滿する、燃え出しそうな痺悦。

波打つ粘膜に揉み込まれた腕や脚、背や脇腹や薄い胸が甘やかに火照り、クニクニと揉みまくられている肛門にも抗いがたい心地よさが膨れ上がる。

「はあ、はあ、はああああ……ああ、やら……やらあああ……お尻、イイ……お尻、お尻、お尻いいっ! 胸も、アソコも……ふう、あああ、あうあああ……妖魔のヌルヌルが、プリプリが……き、気持ちよくなって、私……私……あんツ!! あふ……ああんツ!!」

突っ張っていた腕がカクツと曲がり、肉イボナメクジたちに群がられた薄い胸を冷たく硬い床に押しつけるような格好に。

グジュツと潰れた妖魔から、新たな催淫液が分泌される。

小さな乳房がたちまち、淫悦の塊となった。

「ふぁ、あ……あううっ!! や、やら、やらやら、やらあぁあつ! られか止めて、からが、かららが……あああううっ!」

肉欲に支配された少女の身体が自ら床に胸を擦りつけつつ、高々と突き上げた美尻をカクンカクン振りまくる。

(こんなの、こんなの……は、恥ずかしい……の、れしゅううッ!)

羞じらう気持ちは残っているのに、身体はもう止められない。

「くうん、くうん……く、くううんっ!」

仔犬のような鼻声で鳴きつつ、火照る胸を冷たい床に擦りつけて、登り詰めていく鈴子。尻の動きが激しくなり、振り落とされまいとしたナメクジたちが余計に強く密着する。触手がさらにしつかり巻きついてくる。波打つ粘膜が膣といわず尻といわず、四つん這いになった全身を強く強く揉み込んで、骨までトロトロにされてしまう。

そのうえ――。

「ふぁっ!! あ……や、ら、やらやら……入って、くるううっ!!」

幼気な秘裂に潜り込んでいた小さな小さなナメクジたちが、潤みの底でヒクヒクと喘いでいた処女膣穴に、ひとつ、またひとつと潜り込んできた。

指先ほどの大きさしかなく、しかも背に生えた肉瘤も柔らかだから、処女膜は破れない。よって破瓜の痛みはなく、ただ大人の悦びだけが湧き起こる。

「く、ンう……ふはっ!! あ……う、ああああ……ッ!」

男を知らない無垢な膣粘膜が、催淫液に濡れた妖魔の肉襲に踏み潰され、掻き回され、鑷状の口にしごかれる。背に生えた肉瘤のプリプリとした弾力に、柔らかな下腹の内側が減多矢鱈に揉みまくられる。

胎内を掻き回される快感は、膣穴だけではなかった。

「あっ!! あ、あう……あああっ!! お尻、お尻……お尻に、もおおっ!!」

くねる触手に愛撫され、細い尖端をねじ込まれて無理矢理大きくこじ開けられた肛門にも、小さなナメクジたちが列を成して押し入ってきた。

「くう、ああ……ううう……やら、お尻……気持ち、イイイ……ッ!」

羞じらう鈴子を無視し、たちまち蕩けていく菊膜。

執拗に擦り込まれた催淫液のせいで、穢れの肉穴が性感帯になっている。触手に弄られていた入口だけでなく、さらにその奥、直腸の奥の奥まで――。

「ふぁ……ンく、ふはぁ……あううっ!! ふは……ンうううっ!」

ひとつ、またひとつと腹の中に膨れ上がる異物の感触が、鈴子の排泄器官に新たな悦びをもたらす。嫌悪感は微塵も湧かず、一匹這い込んで来るたびに恥ずかしい声が漏れて、四つん這いになった身体がビクン、ビクン、と快感に痙攣する。

背に肉瘤を生やした小さな小さなナメクジたちが、膣と直腸を埋め尽くし、なおも次々と這い込んで来るのだ。一匹一匹は柔らかくても、互いの身体を押し合いへし合いし、隙間がないほど充滿して、やがて本物の男根並みの硬さになる。

「やうあ、あう……あうあ……妖魔が、妖魔が……お腹の中に……あ、あ、あううッ！」
手足を突っ張って反り返る鈴子の頬が、淫悦に蕩けていやらしく弛んだ。

男を知らなかった処女膣壁や直腸粘膜が、冷たく硬くたくましい弾力に力強く揉みまくられる。催淫液を擦り込まれて強制的に発情させられ、さらには濃密な妖気によって肉欲を高められて、柔らかな下腹が快感の塊になる。

「はひい、はひ……ひいひい……ぎ、もち……ひいひい……ッ！」

ひしめく妖魔たちに内側から揉みくちやにされ、蠢く触手に外部から弄り回されている双穴に、とめどなく湧き起こる淫悦の波。ねっとりとした快感が薄い背筋を這い上り、鈴子の理性や羞恥心を侵蝕していく。

振れる腰、打ち振られる尻。

乱れる吐息、嘔き出す汗。

「ああ、うう……ああああ……ら、られかあ……られか……止めてええつ！」

赤らむ頬に恍惚の涙がこぼれ、喘ぐ唇の端から涎が垂れる。

——にゅちゅ、ぐちゅ、くぬちゅっ！

獲物が陥落寸前になっているのを察知したのか、群がったナメクジや肉紐が動きを強めた。濡れて波打つ粘膜の腹で、胸といわず尻といわず、火照った牝の柔肌を力強く愛撫する。膣や尻穴の中、ひしめくほどに充満した小さな妖魔たちが、背の肉瘤を震わせて互いを揉み合い、鈴子の双孔に催淫液を擦り込んで、濃密な妖気で炙る。

「ひい、はひ……ひいっ！ はあ、はあ、あうう……ッ！」

冷たく硬い床に火照る乳房を必死に擦りつけ、高々と掲げた小振りな美尻をいつそう激しく振りまくる鈴子。

動けば動くほど気持ちよくなり、もはやなにも考えられない。

自分がどこにいて、どんな格好で、なにをしているのか——それすらも分からず、ただただ本能に命じられるままカクンカクンと空腰を打つ。

「ふう、はあ、うううう……も、もう、らめ……もうらめ、らめらめ……らめええつ！
胸も、お尻も……あ、あしよこもおお……気持ちいい気持ちいい……き、気持ち、よしゅぎて……はひ、はひ……はひいいい——ッ！」

——びくんっ！ びくんっ！



膣奥にふつふつと湧き上がってくる、こらえがたい疼き。

知らず知らず腰が浮き、恥ずかしい蜜に濡れて締まることを忘れた膣孔を、群がる男たちに見せびらかすような格好に。

「んん？ どうしたんだお嬢ちゃん？」

「ひよつとして……オマンコが寂しくなったから、おねだりしてるのかな？」

「ち……違ううう……違うの、違うのおお……！」

涙声で叫び、懸命に否定したのに、深琴の腰は頷くようにカクン、カクン、としゃくり始める。閉じ方を忘れた膣穴からはねっとり濃密な愛液が絶え間なく溢れ出し、仰向いた肉畝を乗り越えて会陰部に垂れる。浮いて揺れる桃尻から滴り落ち、シーツを甘酸っぱい粘液でぐっちより濡らす。

男たちが言う通り、膣洞がこらえがたく疼いているのだ。

絶頂に到る前に太い蟲を引き抜かれたせいなのか、あれほど恥ずかしがり、必死に拒んでいた肉の悦びが、いまは欲しくて欲しくてたまらない。

周りにはこんなにくささんの男たちがいるのに、その股間にはあんなに立派な淫棒が雄々しく反り返っているのに——どうして挿入れてくれないの、奥まで滅茶苦茶に掻き回して欲しいのに——。

（ち……違うッ！ 私……私……私……）

危ういところで踏み留まり、墮ちていく自分を止めようと歯を喰い縛る。

いまここで、こんな目に遭っているのは、自分が幽霊を怖がってミスをしたせい。だから自分が水依や鈴子を助けなければならない、淫悦がどれほど気持ちよくても、溺れてしまふわけにはいかない――。

そう考え、なんとか闘志を掻き集めようとしたのだが、

「あうあ、あう、あへああつ!? も、もうらめ、らめ、らめなのれしゅううッ! 鈴子は……おかしくなつちやうのれしゅううッ!」

男たちの厚い胸に挟まれ、二本の男根に腹の奥底を突き上げられてリズムカルに上下している鈴子が、舌つ足らずな声で鳴いた。

「イク、イクイク……またイツちやうッ! お、お尻れ……お、オマンコレ……ああ、あうあ……あうあ、あうあ、あ、ああああ……あひいいいッ!」

涙をこぼし涎を垂らし、蕩けた顔を跳ね上げてビクンビクン痙攣する隻眼の少女。

薄闇の中に反り返った薄い胸の左右に、可憐な桃色乳首が弾けんばかりに勃起している。天井を振り仰いだ柔らかな頬は恍惚に蕩け、サクランボウのような唇は淫らな笑みを浮かべ、涙に濡れた円らかな瞳が焦点を失ってゆらり、ゆらり。

天使のように愛らしい鈴子の胎内に、男たちの劣情がどつどつと注ぎ込まれる。少女の無垢を胎内から、濃密な白濁液が穢していく。

「あ……あああ……あちゅい……あちゅいの、があ……お腹の中に、いっぱい……どびゆどびゆ……してるぅ……」

(な、なんて……気持ちよさそうな、声……)

仲間のよがり声に、深琴の欲望が掻き立てられた。どうして私は抗っているのだろう、どうして鈴子のように気持ちよくなつてはいけないのだろうか――。

(だ……だって、こうなつたのは、私のせい……わ、私が、鈴子を……私が、水依を……た、助け、ないと……だから、だから私は……私は……)

溶け消えそうな理性を懸命に引き留め、肉欲の囁きを無視しようとする深琴。
だが、

「ンじゅ、ぷふ……ンッ!! ンうう……ぶはぁ! はぁい、次の人お……」

立位で背後から膣穴を犯されつつ、上半身を倒して別の男の淫棒をしゃぶっていた水依が、口端から精液混じりの涎を垂らしていやらしく笑う。鼻先に新たなペニス突きつけられれば、自ら口を開いてアモツと唾え込み――だけでなく、左右の手にも一本ずつ異形の男根を握り締めて、

「ンもっ! んちゅ……お、おいふい……ちゅっ! ンじゅっ! んちゅッ!」

青白い粘液が垂れる頬を弛めて淫らに微笑む。

(す、水依……なんて、たのしそう……鈴子も、あんなに……気持ち、よさそう……)

仲間たちの様子を横目で窺っていた深琴の心が、揺らぐ。

ふたりとも、助けなくてもいいのではないか？

自分も、こんなに辛い思いままでして我慢しなくてもいいのではないか？

力を抜けば、楽になれる——いや、鈴子や水依のように、身体ばかりか頭の芯まで蕩けるほどに、気持ちよくなれる——。

(……つて、ダメッ！ そんなの、ダメッ！)

墮ちきる寸前でハッと我に返り、深琴は慌てて首を振った。

自分ひとりの力ではもう、ふたりを助けるのは無理だろう。だが、そうだとしても、敵の正体は高等な妖魔、その目的は古妖・牛鬼を復活させること——この情報を、退魔屋本舗に伝えなければ。

敵の正体を伝えれば、それだけ対策を立てやすくなる。

情報さえあれば、あとは武や〈夜〉、そしてヤマトが、きつと、必ず、いやらしい妖魔院長や怖ろしい牛鬼を討ってくれる。

「だから、私は……負けられ……ない……なにをされても、絶対に……絶対に、負けないんだからッ！」

「ほう？ それは面白い」

自らの使命を思い出し、必死に抵抗している深琴に、いやらしく笑み崩れた患者がのし

かかった。股間に生えた異形のペニスを振り勃て、とめどなく愛液を噴きこぼしている深琴の秘裂に先端を向ける。

「……ッ!? そ、そんな……ものっ! 怖くなんか、ないん……だから……」

慌てて強がった深琴の声は、恥ずかしいくらいに上擦っていた。

抗う意思に反して胸が高鳴る。

見るからに硬そうな異形のペニスの、猛々しく反り返ったその姿。

むくれて大きな亀頭、クワツと張り出した鋭いエラ、木の根のように捻れた肉棒と、いくつも生えている硬そうな肉瘤——そのひとつひとつにめくるめく快感を期待し、膣孔が入口から奥の奥までぞわぞわと疼く。

（ち、違う……ダメッ! あんなの全然、き、気持ちよくなんて……ないんだからっ!）

必死に拒み、懸命に否定するのに、天を突かんばかりに反り返った太い淫棒に視線が吸い寄せられて離せない。締まることを忘れた膣孔がヒクン、ヒクン、と大きく喘ぎ、淫らに咲きこぼれた粘膜花弁の縁に愛液の滴が大きく膨らんでしまう。

「怖くない? まあ、そりゃそうだ」

「こいつはお嬢ちゃんを気持ちよくする、魔法の棒だからなあ」

「うっ!? あ……ち、違う、そんな意味じゃ……やっ!? あ……ンああっ!?」

不気味な色合いに照り光る亀頭が、深琴の割れ目にグイッと押しつけられた。

その瞬間、蜜まみれの粘膜花卉に心地よい電流が走り回る。

(や、やだ……私、こ、こんな連中に……こんなことされて……あ、あ、あぁっ!?)

感じてしまう己をどんなに恥じてても、湧き上がる快感は抑えられない。

見た目以上に硬く、想像以上に熱い牡肉にぐちゅ、ぐちゅ、と掻き分けられた淫唇がたちまち気持ちよくなり、深琴の腰から力が抜けた。

「いや……ああダメ……い、やあ……ッ！」

くぼ、くちゅ……ぐにゅちゅっ！

裏返った叫び声を無視し、壺口をこじ開けて押し入ってくる、太い存在感。

先ほどまで入っていた芋蟲とは、まるで違う。

プリプリした肉棘も、しきりに動く小さな脚もない——が、

(な……なに、こ、れえ……ッ!?)

入口から膣奥へ走り抜ける熱い波に、深琴は思わず息を呑んだ。

硬い太さに揉み潰された膣壁が、たちまち甘く蕩けてしまった。どこまでも心地よい、抗いがたい肉悦だ。この穴は、これを受け入れるためにあるのだから、当然と言えば当然なのだ。剛直に押し拡げられた牝粘膜がたくましく力強い牡の感触を素直に喜んでいる。

「へへへ……どうだ嬢ちゃん？ 本物のオチンチンの感触は」

「ふぁ、う……んくうう……ッ！」

気持ちよくなっていることを下劣な男たちに感づかれまいとして、深琴は咄嗟に唇を噛み、瞼を固く閉じて小さく首を振った。

だが、しかし――。

――ぐちゅちゅ、ぐちゅ……ぐちゅっ！

「ンふ……く、ンうう……ンうっ！」

ズン、ズン、と打ち込まれた太い淫棒が深度を増すにつれ、衝撃的な快感が膣洞を駆け抜けて子宮に反響、温かな肉悦に変化して身体の芯に蓄積する。淫茎に生えた肉イボのシリコリとした感触が壺口を潜り抜ければ、

「ふはっ!? あ……うう……ッ！」

稲光のような快感が閃き、恥ずかしい声が漏れてしまう。

「どうした？ ダンマリか？ 負けないんじゃないやなかつたのか？」

濁声だみこえで煽られ、自尊心がひび割れるが、もはやそれどころではなかつた。

(ダメ、やだ……こ、これ……気持ち……よすぎっ！)

太く硬くたくましい存在感が胎内に膨れ上がるに正比例して、湧き上がる淫悦も際限なく強まっていく。壺口をこじ開けられたときにはまだ、恥ずかしい声を出すものか、と身構えることができたのに、

「うう……ふはっ!? く……ンあああっ!!」

必死に嘔んでいたはずの唇が、喉の奥から迫り上がってきた甘え声にこじ開けられてしまった。いやだ、恥ずかしい、と思う間もあらばこそ、

「ンあう……ンく、くうん……くうん、くうん、くううん……ッ！」

男の腰の動きに合わせ、仔犬のような鳴き声が次から次へと溢れ出す。

「ハハッ!? なんだよ嬢ちゃん、もう感じまくりなのか！」

「予想以上に可愛い声だな、こりゃあ犯り甲斐があるってもんだぜっ！」

男たちの下劣な言葉を浴びせられても、深琴の頬は強張らなかつた。

（だって……だってこれ……こ、こんなに……ああ、こ、こんなに……ッ！）

膣奥に達した亀頭がズン、ズン、と前後するたび、痺れるような快感がヘソの裏側に膨れ上がる。勇ましく怒張した肉塊にポルチオ性感帯を突かれれば、

「はうあつ!? あふ……あううんっ!?」

熱い津波が背を駆け抜け、意識も理性も羞恥心も吹き飛びそうになる。

深琴の膣洞は、芋蟲型妖魔の硬い爪とプリプリした肉イボに掻き回されていただけでは、蠢く妖魔が放つ淫の気を、直接流し込まれていた。

その結果、ただでさえ敏感な膣壁の一枚一枚が、自覚以上に発情していた。

淫らな蜜が肉畝を乗り越えるほど大量に滲み、腰が勝手に動き出してしまっただけで、がたく疼いていた。

そんな膾穴に、妖気を放つ巨根が力強くねじ込まれたのだから、耐えられるわけがない。「や……ら、ああんっ!? だ、ダメ……ら、らめ、らめええっ! お、おく……奥を、そんな……んああっ!? あう……ああううっ!?」

最後の一突きを打ち込まれ、仰向けに押さえつけられた身体を弓形に鋭く反らして、紅く染まった頬に法悦の涙をこぼす深琴。

亀頭にグリッグリッと抉られている膾奥はもちろんのこと、たくましく強張った肉イボつきの淫茎にぐちゅ、ぐちゅ、と擦り潰されている膾洞にも、熱い悦びが渦巻いている。

蟲ほど器用には動かないものの、蟲より遥かに硬く、しかも太い。

亀頭と言わずカリ首と言わず肉棒と言わず、無数に生えた大小の丸みは碁石のようになめらかで——しかも熱い。真っ赤に灼けた鉄の棒のように熱い。

そんなものがゆっくと、しかし力強く、律動している。

進むときにも引くときにも繊細な膾壁がグチュグチュと擦り潰され、蕩けるような痺れるような、ほかのなにも比べられない強烈な快感が、次から次へと湧き起こってしまう。

「やうあ、あう……ああうう……らめ、らめ……らめえええっ!」

気持ちよくなつてはダメ、感じてしまつてはダメ——頭の隅で羞じらう自分が叫んでいるが、なぜダメなのかは思い出せない。

言葉とはうらはらに頬が弛み、涎を垂らす口端に淫らな微笑みが浮かぶ。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

